

社説

世界列國海軍擴張の現状

日清戦争の結果は非常の威嚇を世界の諸國に與へたるもの如く彼等は昨年以來殆んど併合せたるやうに海軍擴張の熱度を高めて目下の形勢は殆ど海軍競争時代の高潮期として懸む可きに似たり實際に主動者として世界の風潮を動かしたる日本國民は其列國が今正に斯業に汲々たる有様を見て感奮興起す事の一の實を勉むるの決心なかる可らず今その有様を記すに當り先づ六強國の海軍經費及び造船費を示さん

Table with 2 columns: Country (e.g., 英, 佛, 米, 露, 日, 伊) and Naval Budget/Shipbuilding Expenses (e.g., 一八七〇,〇〇〇, 二一,八二三,〇〇〇).

英國

より始めんに英は流石に世界第一の海軍國を以て自ら任ずる其責任實際に空しからず軍艦製造の盛なるも驚く可きものあり既に七年間に竣功したるもの及び工事に着手して目下製造中のもの大凡を百五十七隻、六十四萬五千七百七十噸(水雷艇種を除く)の多きに達したる中にもマゼテック及びマグニフセントと名くる二隻の最大一等主戦艦(共一萬四千九百噸餘)が起工の後僅々二箇年以内に竣成したるは造船社に異數の手際として認められたる所なり此兩艦は本年の春海峽艦隊の旗艦として任務に就き威風凛々、遠りを拂て對岸の佛國北海艦隊をして一驚を喫せしめたりと云ふ然れども英國は常に制海權即ち海上を一手にして敵艦なからしむるの權力を維持するを以て立國の精神と爲すものなれば尙ほ之に満足せず本年度の豫算に於て更に主戦艦五隻、巡洋艦十三隻、都合十三萬八千餘噸、外に速力卅節の輕快敏捷なる水雷破獲艇二十隻を新造し海軍兵員五千人を増加するの計畫を立てたり本國の政府は其保守黨たる自由黨たるに拘はらず海軍を以て軍備の主位に置き歐洲大陸の諸國が國境の防衛を嚴にして互に國勢平均の維持に勉むる其體を論じ對にして専ら海軍に力を注ぎ其艦隊を他の軍種と同一視し海軍費を陸軍費に對照す可きものとして止むを得ざるは列國と比較上、微塵なる陸軍の力を設くも海軍は是非とも所要の程度に達せしめざる可らざるの一義を固く承認して始終その方向に進みつゝあるものなり近來フランス、イタリア、事件と云ひヴェネチア、事件と云ひ又土耳其事件と云ひ一時は風雲を巻いて其は國境の時ありしにも拘らず國內に危機の念を起さざれば國民一般に自衛軍の擴張願ひに足るの實を備へたが爲にして其擴張の願ひは尙ほ何れも年々増進して海軍擴張の熱度と云ふ其軍中にも反響してま

す熱心の度が高めたるは彼の海軍擴張の著者ブラスー氏が今や英國の輿論は如何なる代價を投じても制海權の維持を勉むるの一點に同意するが如しと揚言しあるを見て知る可きなり更に又注目す可きは英人が一昨年末に海軍同盟會なる私立協會を創設したる一事なり會員の重なるものは貴族、海軍軍備將校、商船會社、商業會議所、株式取引所等の頭取にして其目的は海軍思想を國內一般の人民に普及せしめ又政府海軍案の通過を賛成補助するを主眼として各種民地にも夫れ々支會を設け互に聯絡を通ずるの計畫にて既に香港の如きは其設立を見たり本年の國會に海軍軍備兵増加の問題出づるや該協會は機關雜誌に於て大に所見を述べ其増加は假令巨額の公債を募るも實行せざる可らざる旨を論じて非常に感力したりと云ふ思ふに我國は英國と地位國情を同うして海軍を以て立國の精神と爲す可きものなれば其實例に鑑みて大に擴張の實を擧げんみと國民たるもの一日も忽ちす可らざる所のものなり次に

佛國

を見るに本年度の海軍豫算が前年度より稍や減少したるは一時の變態にして本國政府の原案は前年度に比して多額なりしを豫算委員會に於て削減したるものなり蓋し近年來佛國海軍費の増加したる割合は非常のものにして既に六年間に百分の三十五に上り其割合は之を英國に比するも尙ほ大にして本年度の豫算は三國同盟(獨逸、露、日)の豫算に超過するものと八十萬噸なりと云ふ本年度豫算中の新造艦は主戦艦、巡洋艦各一隻合して一萬八千噸其他小形艦六隻に過ぎざれども其理由は前年來製造中もしくは新に起工す可きもの甚だ多くして總計六十隻内主戦艦九隻、装甲海防艦三隻ありに達し公私の造船所共に繁忙を極むる際なれば一時に多數の製造に着手して其竣成に長年月を要するよりは寧ろ少數を製造して速に功を奏するの方針に出でたるものなりと云ふ又佛の内閣は更迭頻繁にして海軍卿の如きも千八百七十年來卅一回の代辭を見たりも海軍の實勢には毫も影響を及ぼさずして若々進歩の一方のみなりと云ふ以て其基礎の確實なるを知る可し殊に造船、造兵術の新工風は佛人の得意とする所にして彼のヘルツホールの水管式汽鍋の如きは最良汽鍋として各國の歡迎する所と爲り其他大學校の新設、船渠の増築、甲鐵艦の燃料に石油油を採用したる等、政長進歩の實少なからず就中海軍名譽の制を設け航運業者及び沿海の漁業者と懇く名譽に登録し海軍徵兵の本源として有力の軍備員を儲るの便に供し目下その人員は十三萬五千人の中國萬人は戰時に於て最も頼む可き艦隊補充兵の資格を有するが如き佛國海軍の特色にして此一點に要するに流石の英國も一着を譲らざるを得ずと云ふ以て佛國の海軍が世界に於て自から第二位を占むるの實を見る可し

紡績絲輸出の増加

昨年一月より同八月に至る本邦絲綢の支那に輸出したる高は六十三萬圓餘に過ぎざりしも戰後後大に其賣行を増加し本年は一月より八月迄の間に二百二十三萬八千五百餘圓の輸出を見るに至りたりと云ふ右は大阪紡績會社より輸出の二千八百俵と最多數とし鐘淵、藤澤、

平野、濱華、三池其他の各紡績會社の輸出に係るものにして此總額數は二萬四千三百七十四俵なりと尙ほ昨今内地に於ける綿絲の賣行は一寸薄付き機織にて相場は左二十手九十四圓、十六手九十四圓七十五錢位なれども上海にては七十二兩半なりと云へば現時の爲換相場によりて換算し輸出の入費を差引くも上海着にて九十七圓に賣捌くを得れば此際輸出せよと大阪紡績會社へも電報ありしより依て同社は概々輸出するの見込にて其他の手口より輸出するならんとのみとなれば本年の輸出額は非常に多かるべしと一昨日大阪發の通信に見ゆ

女武者

わかば

第四十回 眼射の尾
「言甲斐なき武士も有るものかな、吾等は此御山を塞ぎしに、諸方の途に網を張り、能き鳥を捕へんとすなるに、知らずしてかゝりしみを汝の不運、然しなから此裏道を夜越になすは、汝も正しき者にはあるまじ、正しからぬ者の財寶奪ふに何に憚らん、口數利か身ぐるみ脱いで黄金を渡せ、猶餘なれば幸ひ難せん、吾等は夫なる岩窟の窟の山猫が手下の者、氣荒が自慢の緒熊の七次赤目左衛門、兎ても蛇に喰はれし蛙と諦めて、骨と肉が狼の餌食とならぬ内、柔順に吾等が言葉に従へよ」と、五分罷生へし頬を左手に撫で、刀を杖にテロリと細口を覗みけり。
「一、汝相な、此度武士がいかでか黄金を持ち候べき、そは皆様の御目遠ひ、御免しあれや」と逃げ出さんとすを、帯際取つて引戻し、腰に計りに足蹴になして、懐へ手を差入れんとする一刹那「已れ」と計り露聲一聲、鐘を渡るが如き聲響く、曲者の手を捻返して、二人を均しく膝下に引きよせ、腰纏の尾を踏んで夢驚かす曲者奴、抑も吾を誰ぞかと思ふ、汝如きの百千人、鐘が響かざるも、吾如何ぞ思はん、汝が頭顱の山猫とやら、いづれに居るか白狀せよ、命のみは格別の情にて許しやらん」と、命途顛へ取きたる、其五郎は忽ち磐石の如く、メックと立つて二人の襟首引つかみ「僕はらは鐘を白狀せよ」と罵る時、二人が足は忽ち宙に浮きて、懸き包みと引上ぐるにも似たりけり。
「今日は頭顱の誕生日にて、岩窟の中で酒宴の最中、喰はる様な呪の聲の幽に聞ゆるは、手下の奴原がく、喰ひつて、唾を吐くにや候はん、何卒本日は御免を」と、顔の色を著めて、齒の根も浮びし有様に、細口は笑ふて拳をかため、鐘くもを叩きたり、助けんとは思ひしが、汝等の如く弱き者は向後の役にも立つまじきぞ、不意ながら引取りせん」と、左手に動して右手にて打てば、アツト平りに此世の名、首の骨はヒョリと折れて、眼を白黒の斷末末、ウンと仰向に伏

るを、力に、猛然として、山賊其處、面を望んで、走る所を、走らば、依懸不敵、只果然に取ら、地を踏さしか、仁王立ち、汝